



校長室から

校長 河須崎 恒

まず、本校第64回の卒業証書授与式が、厳粛な中、つつがなく挙行できましたことに心からお礼申し上げます。お陰様で、282名の新たな「鹿島高校卒業生」を送り出すことができました。ご家族の深い愛情と卒業生一人一人の努力が実った結果なのはもちろんですが、励まし、支えてくださいました小中学校時代の恩師の先生方、そして地域の皆様に改めてお礼申し上げます。どうぞこれから新米卒業生や本校在校生を、温かく見守りいただきたいと存じます。



さて、いつもこの時期になる度に考えさせられることがあります。子供たちにとって、そして送り出す教師にとっての「卒業」の持つ意味です。子供たちにとって「卒業」は人生の中の一つの区切りです。節目と言ってもいいでしょう。自分の一生の中に卒業という1ページを刻むと同時に、次の節目(区切り)に向かって「生きる」ことが始まります。高校3年間を振り返り、これからの道をしっかりと見定め、自らの意志で自らの道を切り拓いて行かなければなりません。その力を養うような教育ができたか? 教師としての自問です。悔いと言ってもいいでしょう。

では、「生きていく」とはどういうことなのでしょう。私には、それは選択と決断の繰り返しだと思えます。日々の小さな選択と決断がその人の人生を紡いでいく。しかも、まさに「待ったなし」が「生きていく」こと。

「荒海に漕ぎ出す」とはよく言ったものです。心配すればキリがありません。「案ずるより産むが易し」「親がなくても子は育つ」とも言います。自分の足下をしっかりと見つめ、一步一步、歩み続けてくれることを信じたいと思います。

それにしても、何度自問したことか。答えを見つけないまま来年でタイムオーバーになりそうです。

卒業おめでとう!

卒業式の涙は、三種類ある。本人、家族、そして、教師。私たち教師にとっても、卒業式は大きな感動の日である。入学して三年たてば卒業、なのだが、その三年の月日の密度が



ここを震わせる。何事にも誠実で意欲的な生徒。ちょっと勉強が苦手な生徒。学校や友人関係で悩んだ生徒や、いつも明るく周囲を和ませていた生徒。三年の月日は、一人一人をその人なりに成長させている。今彼らに入学の頃の面影を探すのは難しい。



高等学校の卒業は、大人社会への扉を開く



ことになる。本人たちはそれと気づかぬまま、その扉は否応なしに開く。開いた扉の向こうが見えぬまま、彼らは旅だっていく。

けれど、見えない、ということは、実は大いなる自由を手に行っていることなのかもしれない。その自由を、一人一人がどう生きていくのか。私たちはここにいて、それを見守っていく。

卒業生の明日に幸多からんことを。

～年度末の主な行事～

- 3月1日：第64回卒業式
- 4日：学力検査(～5)
- 12日：合格発表
- 20日：終業式
- ・春季学力向上講座等
- 4月7日：始業式

放課後⑨～調理部・吹奏楽部～



2014 年 12 月 18 日、調理部と吹奏楽部が、「ひとり暮らし高齢者ふれあい食事会」に参加しました。年に二回開催されるこの行事、毎回 100 食程お弁当を作り

ますが、調理部の生徒たちは手慣れたものです。彩り豊かで、栄養満点の食事を召し上がっていただきました。その後は、吹奏楽部による演奏会。こんな近くで聞いていただくことはありませんないことですが、楽しんでいただけたでしょうか。



リレーエッセイ 鹿苑今昔⑩～ネパールへ～

10 年ほど前のこと、市内各地に手製の募金箱が置かれた。箱には、「鹿島高校生徒会」。ネパールに学校を建てるための募金活動、とのことであった。詳細については『鹿島高校百年史』



にある。昨秋、文化祭の収益金でパソコンを購入し、「ネパール子ども奨学支援会」の方に届けていただいた。

上の写真でパソコンを持っていらっしゃる方は、学校建設当時、担当職員だった方。右は、その頃の様子を伝えるもの。鹿島高校の校章が見える。今回も、こうして届けていただいたことで、約 10 年振りの交流が実現できた。



鹿高なう♡

県東地区駅伝大会

男子：優勝、女子：準優勝
運動部から男子 10 人、女子 9 人が学校の代表として出場し、襷を繋ぎました。

弓道部：男子団体 優勝
女子団体 準優勝

ともに、東日本大会出場

千葉県総合スポーツセンター(3/27～29)

演劇部 豆まき in 慈母幼稚園(潮来)

2月3日、幼稚園で豆まきが行われました。「鬼は外!」で5色の鬼を追い出すはずだったのに、園児は泣きっぱなし。部屋の隅に固まっていたそうです。ご褒美のお菓子も恐る恐る。泣かせてばかりでは大変な



ので、最後は鬼と一緒に妖怪体操を踊って記念撮影。さて、鬼の中身ですが、本当は笑顔のすてきなお兄さんお姉さん。さすが演劇部、役者でした。



編集後記：亀が現れた。卒業式を終え、雛祭りの翌日、ふと二階通路から池を見ると、亀がいつもの石の上にいた。私は、いきものがかり、ではない。亀の世話はしていない。しかし、気になるのは確かだ。こうして、亀の姿を自分の目で確かめるとほっとする。春、かな。あの亀は、あの池で、一体何度春を迎えたのだろう。来ては去って行く生徒や職員をどれほど見送ったのだろう。多分その多くは、亀を見てない。見てないのに、亀は、ずっとそこにいるのだ。『鹿苑だより』、今年度は本号で終わります。ごきげんよう。

茨城県立鹿島高等学校 学校だより

『鹿苑だより』第14号(隔月刊)

発行：茨城県立鹿島高等学校

校長 河須崎 恒

編集：広報委員会

中沢雅彦 山崎律子